

# 16世紀・17世紀のアンコール旧都城

## —水利問題の視点から—

石澤良昭  
(上智大学)

### 1) 史料の欠落と『王朝年代記』

カンボジアの歴史というと、私たちはすぐに輝かしいアンコール王朝史とアンコール・ワットなどの素晴らしい建造物を思い浮かべ、「古の奈良の都」的感觉でその歴史がアンコール史にいつも集約されてきた。これまでカンボジアというとアンコール遺跡ということになり、それ以外の時代の歴史的視座がなおざりにされてきた。そうした反省に立って、アンコール王朝以後の歴史考察の問題点を提起いたしたい。

過去のカンボジアの人々は、あれだけ壮大な多くの寺院と豪華な大宮殿、完備した水利灌漑設備と農業生産を誇ってきた。自然環境に恵まれた住民の生活、ある学者はそれを「植物文明世界」というが、これまでにアンコール王朝の歴史解明は一般の人達の好奇心に触発されて、それなりに歴史の大枠が判明してきた。

アンコール都城が放棄されてから、このアンコール地方はどのようになったのか？住民はどうなったのか？遺跡は、灌漑網はどうなったか？

19世紀に編纂された『王朝年代記』の史料批判を踏まえて、さらに16世紀に来航していた西欧人の様々な記録を校訂し、その概略を述べてみたい。

### 2) 『王朝年代記』等の史料批判<sup>(1)</sup>

カンボジア史の研究を『王朝年代記』に基づき始めたのは、ドゥダール・ド・ラグレで、19世紀末であった。それをフランシス・ガルニエが再検討した(1871年)。そのほかには、E. エイモニエ、J. ムーラ、G. マスペロ、A. レクレールなどによる研究成果がある。

その年代は、大体1431年から1594年を対象とする。『年代記』には、一族あるいはバゴダの年代記で、*bañsāvātāra* と呼ばれるものと、王家の年代記 *rapāl ksatra*、または *raja bañsāvātāra* がある。

*bañsāvātāra* はサンスクリット語の合成語である。*v(b)am̐ṣa + ava-tāra* で、*vaṃṣa* は「竹」を意味し、そこから「家系」となる。*ava-tāra* は「権化」「化身」を意味する。

しかし、

*bañsāvātāra* はクメール語では「歴史」を意味する。*raja bañsāvātāra* は「王の歴史」の意味である。*rapāl* は *rapā* の変形で、「物語、歴史」を指す。*ksatra* は、王と王子の意味で、したがって *rapāl ksatra* は「王の歴史」になる。

#### (1) 35種の版本がある『年代記』

『年代記』そのものは、断片あわせて現在わかっているだけで35種ある。そのうち基本となっているのは8種で、1818年から1966年にかけて執筆されたものである。この1世紀半の間に、形式

も内容もいろいろと変化した。1818年から1903年の間に執筆・編纂された『年代記』は18世紀以後についてやや詳しい記述となる。1903年以後になると、おそらくフランスの影響を受けたのであろうか、『年代記』は一新される。形式としては章立てとされ、内容も大きくふくらむ。

ところが、1796年に、Anḡa En 王がシャム王 Braḥ Puddha Yathvā Cullaioka (ラーマ1世)に『年代記』を贈っていることがわかっている。ただし、現存する原本はシャム語訳のものだけである。これは、セデスがフランス語に訳出し、出版している (BEFEO, C.XVIII, fac. 9, p.23~)。これは、断片で非常に短く、1346年から始まり、15世紀半ばで終わっている。一部の王のついては、名前と統治期間が記されているに過ぎない。情報が簡潔で、王を確認するのは困難だが、最後の部分だけは最近の『年代記』と照らし合わせてみたところ共通点がいくつか見られる。

『年代記』を研究に携わったフランス人・カンボジア人研究者ほぼ全員が共通して主張するのは、年代記作家は基本的な事柄をなおざりにしており、時には王家の名誉にかかわるような微妙な事柄には沈黙するという点である。それに加えて、意味もない祭儀などを必要以上に詳述している。

## (2) 『年代記』編纂者は、失職を恐れていた

昔のクメール王は、その時代の『年代記』を編纂させた。そこに記録されるのは、王家の歴史、戦争と勝利である。これらの『年代記』は、16世紀のシャム(タイ)との数多くの戦時中、とりわけ Lanvaek 占領があった1594年、さらに18世紀以降のシャムとベトナムに挟撃され、戦争の際に紛失してしまった。

これら『年代記』編纂を担当していた役人たちは、王から報酬を受けとっていた。偏に王家に関係する事柄を、一つ残らず記録せねばならなかった。それは、常に王の善行、栄光、輝かしい事柄ばかりであった。『年代記』作家は、もし王が戦いに敗れたり、王家の十訓を守らぬようなことがあれば、ごく簡単な記述にするか、あるいは単に沈黙してしまうしかなかった。その結果、これらの『年代記』はその作者によって、また編纂された時代によって性格が異なる。

## 3) 1431年以後のアンコール旧都城<sup>(2)</sup>

### (1) 密林に覆われたアンコール・トム都城：

1431年頃に放棄したアンコール都城がその後どうなったかの問題は、カンボジア側の諸史料の欠落と歴史空白のためによく分からない。

数々の都城、巨大で緻密な水利施設、荘厳な寺院、ここは600年以上もクメールの人々の中心地であった。それがその後一体どうなってしまったのか。アンコール・トムが放棄され、この都城が熱帯の繁茂した植物群に覆われて瞬く間に見えなくなってしまったとしても、アンコール地方のすべての遺跡がそうだったわけではない。

特にアンコール・ワットにはいつも近づくことができたようである。ポルトガル人とイスパニア人の報告を読めばそのことがよくわかる。これは、今日までクメール人たちがアンコールの大寺院に関する言い伝えられていることとほぼ同じであり、間断なく語り継がれてきたことの証しである。

## (2) アンコール・トム都城の再発見：

なぜアンコール遺跡地域の一部だけが、濃密な森林に覆われてしまったのか説明するのは難しい。ただ、アンコールの最後の王たちのもとで、アンコール・トムとその周辺に当時の人口が集中していたらしいと推測できる。いずれにせよ、13世紀以後の痕跡が一番多く見つかるのはアンコール・トム一帯である。したがって、そこは14～15世紀にどこよりもシャムの侵攻の被害を被った場所であった。戦争の惨禍、貯水池や水利灌漑施設の徹底的な破壊は、日常生活を根こそぎこの地から追い出してしまう結果となった。

しかしながら、アンコール都城の南や西に広がる地方、その当時はずっと田舎だった地方では、クメール人たちが住み続け、耕し続けていたようである。1431年頃のアンコール都城放棄について語るとき一言いっておきたいのは、アンコール・トムは王の居城としては放棄されたが、全く人が住まなくなったというわけではない。アン・チャン王は1510年頃と、おそらくもう一度1540年頃にアンコール地方に出掛けて行き、シャム軍を撃退した。

そして、カンボジアの王たちは事あるごとに偉大な祖先たちのゆかりの地に駐屯した。ここはシャム軍との戦いでは常に宿营地でもあった。

ディオゴ・ド・コートの草稿には、アンコール・トムは1550年もしくは1551年にこの地で狩りをしてきたカンボジア王によって再発見され、豊饒なこの地に魅せられた王はここに宮廷を定めたところである。

## (3) いつ、だれが発見したのか：

コートの記録では都城の再発見を1550～51年と述べている。とすれば、アン・チャン王に結び付く。事実、アンコール・ワットには16世紀の時代とされる碑文がある。また、1563年と1566年の碑刻文が存在し、後者はおそらく1555年のことと思われる仏教建築について述べている。どれをとってもアンコール地方の復興を証明するもので、コートが記した年代は見事なまでに正確である。1) 当地で狩りをしてきた王がアンコール・トムを発見した。2) 王が王宮を建設し、人口が増加した。ここで考え得る限りの史料を渉猟してまとめると、次のようになる。

- ①1550～51年、アン・チャン王がアンコール・トムを発見する（コートの記録）。いずれにせよ、アンコール・ワットに碑刻文が再登場する。
- ②さもなければ、1570年頃、多分バロム・レアッチア2世が近くに滞在のおり、その時にこの古い都城を発見し、再び入植させる。
- ③そして、遅くとも1576年までに、サータ王はアンコールに入った。このときまだだったとすれば王宮を造り、アンコール・ワットを修復した。王に招かれた宣教師たちは、遺跡を見て最初に情報を広める役割を担った。それは西欧にまで届いていた。

## 4) 16世紀のアンコール地方はどんなところだったか？

西欧人によるこれまでの様々なアンコール関係報告書を検討する。アンコール・トムとアンコール・ワットに関する事柄、加えて遺跡全体に関係する情報とそれにまつわる名称と由来、次いで存続するアンコール・トム水利組織についての報告などがある。

## (1) アンコール・トム都城

16世紀に時のカンボジア王が発見し、住民を再入植させた場所はいわゆるアンコール・トムであり、往時のポルトガル人、イスパニア人報告者たちはたいていこの都城の話から始めている。

①都城の城壁と城門：アンコール・トムは完全な正方形ではない。北側は3,096メートル、南、東、西側はそれぞれ3,070、3,031、3,036メートルである。

周囲に巡らされた城壁は全く接着剤を用いず、ラテライト石材のブロックを擦りあわせて密着させ積み上げたもので、クメール人独自の手法である。城壁は平均して7.5メートルの高さがある。

アンコール・トム都城には4方向に、つまり東西と南北に走る一つずつの城門があり、さらに東に第5の城門、すなわち勝利の門が王宮と東バライを結ぶ基軸上にある。これはジャヤヴァルマン7世が都城を造営する以前からあった主要道路の一つであり、そのまま残されたものである。コートは驚くほどの確で、基軸道路上の4つの城門と「王宮」に通じる5番目の城門を挙げている。

②バイヨン寺院と王宮：アンコール・トム都城内部の遺跡を訪れたポルトガル人はあまりいなかったようである。少なくとも注意を引かなかった。5000～6000人のクメール人男性が数日かけて府内をきれいにしたとコートはいうが、せいぜい中心部と大通りの雑木や下生えを刈り払っただけである。コートは都の中央にある「この上なく素晴らしく、しかも未完成の寺院」について語る。ドス・サントスもまた、アンコール・トム都城中央部にある「偶像寺院」に言及している。

③アンコール・ワット：アンコール・トム以外の遺跡について、西欧の報告者たちの中でも特にコートとドス・サントスが報告の対象として採り上げたのはアンコール・ワットである。コートはこの遺跡の名ガイドそのものである。アンコール・ワットはアンコール・トムの南城門から南へ0.5リユエの所にあるとコートはいう。確かに、アンコール・トムの南大門からアンコール・ワットの西門までは1.700メートルある。そして、この寺院の環濠は幅200メートルあり、西側に伸びている参道、参道入り口階段の両側でこれを守る獅子の形をした石像に注目している。

コートによれば、アンコール・ワットの中央にある5つの塔堂は金色に彩られていたという。どうもアンコール・ワットの塔堂が金色であったというのは本当のようで、尖塔のてっぺんには金色の金属飾りが取り付けられていたのは確からしい。この中央塔から採取した金色化粧漆喰の細片などを専門的に調べてもらったところ、これらは後世の修復によるものではないかと報告されている。このことは本来金彩色が施されていたことを否定するものではない。

コートは最後に、アンコール・ワットは墳墓寺院のようだと遠回しにいつている。「ほかの数多くの寺院は、……諸国の領主の墓所だったように思われる。ちょうど大寺院が建立者である王の墓所(だったと思われる)ように」。この伝承は少なくとも13世紀までにさかのぼり、すでに周達観が記録している。16世紀にもこの伝承がなお伝えられていたことは明らかである。1702年のアンコール・ワット碑文にもこのことが認められる。

## (2) プノン・クレーン丘陵と石切場の記憶：

コートは、これらの寺院建築に必要な石材が遠くから運ばれ、その費用は莫大なものだったに違いないとしている。住民たちはアンコール遺跡群の北東約40キロにあるプノン・クレーン丘陵のことをよく覚えていた。これは砂岩石材の出所については正しい情報といわねばならない。大量に用

いられたラテライト石材は、建築現場の地下から調達されたのである。

### (3) 16世紀におけるアンコール・ワットの呼称：

西欧人が初めて訪れたときにはアンコールは何と呼ばれていたのだろうか。アンコール・トムとアンコール・ワットの呼び名だけは16世紀・17世紀の碑刻文に記されている。

再び住民が住むようになった16世紀には、カンボジアの人々はこの寺院を「ブラフ・ビシュヌロカ（スールヤヴァルマン2世の諡号）」以外に、ただ単に「ナガラ（都城）」あるいは「ブラフ・ナガラ（聖都）」と呼んでいたようである。こうしてクメールの口承伝統は継承され、再び首都を見いだしたのである。

### (4) 16世紀の諸王がなしとげた仕事

例えば、プレア・ピトウ寺院やテップ・プラナン寺院の整備、バプーオンの寺院西側面に設置された寝仏像、バンテアイ・クデイ寺院の僧坊の改装、「仏教式テラス」工事など枚挙にいとまがない。アンコール・ワットでは第1回廊と参道の列柱の修復、一段と高くした通路などを建設している。これら数々の修復改修事業がいつ行われたかを確定できない。しかし、その重要性からしても2級程度の事業でしかない。

## 5) アンコール・トムの水利網

クメール美術史に関しては素晴らしい研究成果が続出しているのとは対照的に、アンコールの都城の都市工学的構造や土木技術の展開については、正直なところほとんど注意が払われなてこなかった。この分野における発掘調査・研究が欠落していることが大きな理由である。

①西欧人は「最も美しい都城」と絶賛：水利網の大部分は16世紀になお存続していた。西欧の諸史料において、中でもコート<sup>1</sup>の報告にその記述がある。

アンコール・トム内部には5つの基軸となる道路があって、その「両側を満々と水をたたえた水路が沿っている」。コートは、まず始めに都城内部の道沿いに水路があるといい、次にアンコール・トムの外側の記述に移り、環濠の話をする。環濠は北と東の城門近くから流れ込み、南と西の城門近くから流れ出た。この外濠には、シムリアップ川やずつと先の国内から運河をやってやってくる小船が直接出入りできたという。

外濠には堤防の上につけられた道が10メートルほど離れて並行に走っているので、住民たちが外濠沿いに、つまり濠と道の間に家宅を構えていた。コートの描写は適切である。家々には濠に面した出入り口があって、そこに小船を横付けできた。そして、もう一つの出入り口が道に面していた。

コートは、水利組織がどのように機能していたかを見た旅行者たちから話を聞いて、「世界中の諸都市の中で最も美しく、最も交通の便がよく、最も清掃の行き届いた都市である」と締めくくっているが、この文章はまさしく言い当てている。

## 6) アンコール文明における経済要素と農業水利

これら西欧人の証言は、アンコール時代よりずっと後の報告ではあるが、今まで顧みられなかつ

た経済問題に目を向けさせてくれる。それはアンコール文明における経済的側面である。これまでの研究は歴史的枠組みの解明が主な内容であり、往々にしてその骨組みだけで社会情動的肉付けがない。

カンボジアはインドシナ半島で最も広大で、最も肥沃な土地をもっている。クメール民族が生活の糧と実力を手に入れたのはこの土地からであり、まさしく卓越した水利網によってその価値を何倍にも高めたからにはほかならない。

クメール人の農業は専ら稲作であるが、それは2つの条件を必要とする。豊かで平らな土地と水である。この条件を満たす場所で、それも願ってもないような平野と水がふんだんにある地域がこのアンコールの大地であった。4カ月間は土砂降りの雨になる。湖からも河川からも肥沃な泥水があふれ出す。雨はあまりにも短期間に大量に降り、そのあとの7カ月間は一滴も降らない。この不均衡を正すため、アンコールの水利網が整備された。その目的は、水を蓄えておいて合理的に使うということ、つまりクメールの水利の原則とは節約と再分配の法則であった。

この水利網のおかげで、アンコール地方は豊饒の地として1年に3回、さらには4回までも収穫ができたと言われている。

水利網は土壌の保護にも役立った。川の流れを分流させることで、熱帯地方で非常に恐れられている大洪水による土壌侵食が避けられたのである。水利網はトンレ・サップ湖の毎年の洪水を制御していた。アンコール地方を盛土堤防が取り巻き、[周囲を水田が取り巻く]、都城はまるで水に浸かった平野の真ん中にある島のような島であった。

さらに、この水路は人々の交流に役立っていた。堤防には道がつけられていて、季節を問わず往来ができた。それでも、運送にもまた移動にも、まず利用されたのは水路であった。アンコール都城は、例えば19世紀初めのバンコクのような様相を呈していたに違いない。このバイパスの水路を使って、採石した石材を建築現場まで直接運ぶことができた。それにクメールの寺院は左右対称になっているので、四方から同時に建築を開始することができたし、それも迅速かつ効率的に仕事を進めることができたのである。

## 7) アンコール都城の放棄

アンコール朝の滅亡については、政治的な面から、その他さまざまな面から諸説が提起されてきた。確かに、崩壊の決定的な要因のひとつはシャムの圧力であった。アンコール王朝が創設されて以来享受してきた類を見ない平和な状況が続き、それについてはこれまで取り沙汰されなかった。王朝を脅かし邪魔する隣国もなく（チャンパは一度だけ1177年にアンコール都城を略奪）、外部との接触を断っていつも自力で発展していた。王朝にとって唯一の敵は内部抗争であって、そのため分裂を繰り返した。

### (1) シャム（タイ）人への恐怖

したがって、すっかり衰え退廃したアンコール王朝にとっては、シャム人土侯国が創建されて、勢いづいたシャム人の攻撃はなおさら恐ろしいものを感じたのであった。王たちの途方もない野心、建設狂、思い上がった戦争などがこの国を疲弊させてしまった。王と住民との間の溝が少しずつ深

まってゆき、ついにはとりかえしがつかないまでになった。その間隙を縫って上座仏教が広まり、それまでの神王信仰を揺るがした。また、生産の低下は各地で人口の減少につながり、敗戦とシャム軍による住民の数万人の強制連行があった。アンコール以後の人口回復を一層困難なものにした。

## (2) 農地の荒蕪化

さらに、熱帯の国では、補填をしない土地は土壤の疲弊を引き起こす。アンコール時代には絶えず泥水で灌漑され、土地はそれなりに回復した。アンコール時代以後に行われた農法は、下生えを焼くやり方なので、時間の経過とともに土壤のラテライト硬化を進ませ、ついには不毛の地となってしまった。こうしてアンコール王たちの大地は隙間なく丹念に耕されていた農地から、ほこりだらけのわびしい荒れ野に変わってしまったのである。アンコール朝の諸王とその篤信世界が消えうせただけでなく、その存続する物質的基盤も消滅してしまった。水利灌漑網としては、アンコールのように泥土質の土壤のごくならかな自然の傾斜に沿って水を分配する方式は特にもろいといわれている。水路も貯水池も知らぬ間に埋まってしまい、浚渫するのがほとんど不可能である。解決策はどうしても新しい水路を造ることになる。それに、水路の本数を増やせば増やすだけいやおうなく本来の河床がより高くなる。

以上の観点から見ると、「アンコール都城放棄」は非常に具体的な出来事であり、アンコール・カンボジアから近代カンボジアへの移行がより分かりやすくなる。しかし、その内実は大変革を伴っていた。それは、社会基盤そのものも生活様式もすっかり変わってしまったことを意味する。高度に発達した灌漑技術を基盤とした農業生産のおかげで、また伝統的に管理された形で存続してきた中央集権の王国は大きく変質し、国土と住民を引き継いだ次の体制は、自治体の寄り集まったゆるやかな組織体で、自給自足を基本として自然の恵みにのみ依存していた。王国の形をとって従っていたのは、それが伝統だったからに過ぎないといわれている。住民、そして王室自身も上座仏教に改宗した時点で、アンコール時代から引きずった諸展開に終止符が打たれた。アンコール文明から近代カンボジア文明への移行は、社会的経済的仕組みが根底から変化し、それに付随して敬虔な信仰が形成され、現在のカンボジアを特徴づけている。

## 註

- (1) Mak Phœun : Chroniques Royales du Cambodge, (de 1594 à 1677), EFEO, Paris, 1981.  
Mak Phœun : Chroniques Royales du Cambodge, (des origines légendaires jusqu' au à Paramarjâ 1<sup>er</sup>), EFEO, Paris, 1984.  
Khin Sok : Chroniques Royales du Cambodge, (De Baña Yât à la prise de Lanveak), EFEO, Paris, 1988.
- (2) Groslier, B.Ph : Angkor et le Cambodge au XVI<sup>e</sup> siècle d'après les sources portugaises et espagnoles, P.U.F. Paris, 1958 (金山好男 : 書評「B.Ph. グロリエ著、『ポルトガル及びイスパニア史料による16世紀のアンコールとカンボジア』」『東洋学報』42巻2号、1960、pp.129-136。